

中国を視る目を養う

2012年
12月1日(土)
▼
12月22日(土)

日吉キャンパスから考える日中国交正常化40年

2012年は日中国交正常化40周年である。この40年間、日中両国ともに、様々な分野における相互理解を進めてきた。だが同時に日中間にはなお多くの問題が生じていることも事実である。好むと好まざるとに関わらず、歴史的にも地理的にも大きな関わりを持ち、利害を共有する両国の関係においては、相手を冷静に観察し、知的に考察し、関心と理解を深める努力を怠るわけにはいかない。そこで本講座では、慶應義塾大学日吉キャンパスに在籍する中国研究者たちが、中国とそこに暮らす人々がこれまでどのように歩んできたのか、どのような感性を持つのか、どのような社会を築いてきたのか、どのように日本と向き合っているのかといったことに関する具体的なトピックスを取り上げて、その最先端の研究成果を披露する。

講座内容 ① 3時限目(13:00~14:30) ② 4時限目(14:45~16:15) 毎週土曜日開催

12/1	① 日中関係のゆくえ 相互理解・相互信頼の可能性について	段瑞聡 商学部教授
	② 現代中国社会におけるキリスト教の浸透と政治へのインパクト	林秀光 法学部教授
12/8	① 政治と道徳によって変わる『詩経』の読み方	種村和史 商学部教授
	② 文学と革命と 魯迅・トロツキー・毛沢東	長堀祐造 経済学部教授
12/15	① 中国の成長は続くのか? 経済成長パターンの転換と課題	孟若燕 商学部准教授
	② 楊絳:カラクテルの知恵	櫻庭ゆみ子 商学部准教授
12/22	① 日中戦争と文学 南京、そして重慶	関根謙 文学部教授
	② 日中間の荒波 何から何をどうやって守るのか	安田淳 法学部教授

募集要項

- 募集対象** どなたでも
会場 慶應義塾日吉キャンパス内
受付期間 2012年11月3日(土)~各講座5日前まで(必着)
 (第1回締切は11月26日、第2回締切は12月3日、
 第3回締切は12月10日、第4回締切は12月22日)
 12月17日
受講料 各回2,000円(全4回8,000円)(1日ごとの申し込みが可能です)
申込方法 教養研究センターWEBページのお申し込みフォームからお申し込みください。はがき、ファックス、E-mailをご利用の場合は、郵便番号・住所・氏名(ふりがな)・年齢・性別・電話番号・職業・受講希望日を明記の上、下記宛てにお申し込みください。

申し込み受付後に、受講に関するご案内を郵送いたします。受講料は指定口座に納入していただきます。なお、受講料の納入をもって受講登録となります。

●受講者の方々にかかわる個人情報の取扱い

慶應義塾大学教養研究センター主催「キャンパス公開講座」受講に関する個人情報は、「キャンパス公開講座」を含む同センターからのお知らせのみに対して利用し、十分プライバシーに配慮し、慶應義塾ならびに講座運営の委託を受けた受託業者が適正かつ責任を持って適正に管理を行います。個人情報は、ご本人の承諾なしに第三者に提供することはありません。

慶應義塾大学教養研究センター

慶應義塾大学日吉キャンパス 公開講座 事務局
 〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

Tel.045-563-3978 Fax.045-563-3979 E-mail h-ext2012@adst.keio.ac.jp
 URL: http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/ **教養研究センター** **検索**

特別講座「中国を視る目を養う——日吉キャンパスから考える日中国交正常化40年」

第1回 2012年12月1日(土)13時～16時15分

講師メッセージ：段瑞聡(商学部教授)「日中関係のゆくえ——相互理解・相互信頼の可能性について」

今年の日中国交正常化40周年にあたる。しかし、近年日中両国国民の相手国に対する親近感が低下する一方である。なぜそのような状況に陥ったのであろうか。どのようにすれば、関係修復できるのであろうか。本講義では、日中両国の内政と国際関係の視点から、日中関係の現状と問題点を分析し、日中間の相互理解と相互信頼の可能性について検討する。

講師メッセージ：林秀光(法学部教授)「現代中国社会におけるキリスト教の浸透と政治へのインパクト」

2020年には中国のキリスト教信者は2億人に達するであろうといわれている。この結果中国は世界で最大のキリスト教信者を抱えることになるため、中国の政治と社会のみならず、グローバルな政治と文化に対する影響もはかりしれない。本講義では、中国におけるキリスト教(プロテスタント)の浸透と、その政治へのインパクトに関するいくつかの問題についてお話しする。

第2回 2012年12月8日(土)13時～16時15分

講師メッセージ：種村和史(商学部教授)「政治と道徳によって変わる『詩経』の読み方」

『詩経』は『五経』の一つとして、中国史を通じて圧倒的な影響を与え続けた。しかし、人々が『詩経』から読み取るメッセージは決して一様ではなく、為政者が『詩経』をよりどころに自己の正当性をアピールすれば、対立者も『詩経』をてこに批判を展開するというように、『詩経』解釈に託してお互いの思想と主張を戦わせていたのである。中国において古典が持っていた現実的意義を考えてみたい。

講師メッセージ：長堀祐造(経済学部教授)「文学と革命と——魯迅・トロツキー・毛沢東」

毛沢東の文芸講話は、中共の文芸政策の規範として長らく、中国の文学・芸術家を抑圧するものであった。ここでは、1時間目の種村和史教授の中国古典における文学の政治利用の問題提起を引き継ぎ、現代中国における、文学の政治利用という問題を、文芸講話が根拠としたレーニンのテキストの翻訳問題と、毛沢東による文豪魯迅の政治利用を近著『魯迅とトロツキー——中国における「文学と革命」』から紹介する。

第3回 2012年12月15日(土)13時～16時15分

講師メッセージ：孟若燕(商学部准教授)「中国の成長は続くのか?——経済成長パターンの転換と課題」

改革・開放政策の下で豊富な労働力を武器にして、投資と輸出主導の高い経済成長を成し遂げた中国は現在、少子高齢化の早期到来、投資効率の低下、外需の低迷など深刻な問題を抱えている。はたして持続可能な発展への道はあるのか? 減速を転機にすることができるのか? 足元の経済情勢を踏まえながら、講師自らの研究に基づいて中国経済の今後を解説する。

講師メッセージ：櫻庭ゆみ子(商学部准教授)「楊絳:カラクテルの知恵」

1911年と言えば、中国の内陸都市四川省武昌で武力蜂起がおこり、翌年に清王朝から共和制へと政治体制が大きく変わった年。俗に言う「辛亥革命」勃発のこの年に生を受け、その後の日中戦争、国共内戦、文化大革命等々、百年にわたる激動の時代を生き抜き、90歳を越えてもなお瑞々しい語り口を失うことのない稀代の随筆家、楊絳を紹介し、制約の中で生きる知識人の在り方を考えてみようと思う。

第4回 2012年12月22日(土)13時～16時15分

講師メッセージ：関根謙(文学部教授)「日中戦争と文学——南京、そして重慶」

1930年代は日本軍国主義の野望が東アジア・中国大陸を蹂躪していく時代であり、その頂点に1937年12月の南京の悲劇が宿命的に位置づけられている。この講座ではその時に生きた日中両国の文学者が1937年12月の南京をどう作品化していったのかを見つめ、国境を越えた深い理解のあり方について考えていく。

講師メッセージ：安田淳(法学部教授)「日中間の荒波——何から何をどうやって守るのか」

山積する日中間の諸問題の中で、日中両国は自国の安全保障環境をどのようにとらえ、何から何をどうやって守ろうとしているのか。領土や海洋権益について理解を深めるとともに、これから先に何が起きようとしているのか、危機を予防しあるいは危機に対処するにはどうしたらよいかといったことを冷静に考えてみたいと思う。

お申込みは ①Fax ②ホームページ ③メールのいずれかでお願いたします。

①FAXお申込書 (045-563-3979) : 日吉キャンパス特別講座「中国を視る目を養う」

ふりがな			
ご指名:	e-mail:		
ご住所:	〒		
ご連絡先番号:	(自宅・会社・携帯・FAX)	性別: 男・女	ご年齢: 歳
受講希望日 (受講を希望される日程に○をつけてください)	12/1 ・ 12/8 ・ 12/15 ・ 12/22		

②ホームページでのお申し込み
<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>から
(準備中)

③メールでのお申し込みはFax申込書の内容を明記の上、下記アドレスまでご送信ください。
e-mail: h-ext2012@adst.keio.ac.jp

慶應義塾大学教養研究センター
日吉キャンパス公開講座事務局
担当: 木下